

東京バッハ合唱団 月報

[第 587 号] 2011 年 5 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 郵便振替：00190-3-47604
Tel：03-3290-5731 Fax 専用：03-3290-5732
mail: bachchortokyo@aol.com http://www2.tky3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.587

May 2011

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

シャガールの十字架像

大村 恵美子

雑誌『世界』2011年2月号(岩波書店)の宮田光雄氏の論考「ホロコーストの黙示録 シャガールの十字架像の転換」を読みました。

宮田光雄先生は、日ごろ、いろいろな面から私どもの合唱団を支えてくださり、折おりに励ましのお言葉や、著作のご惠贈、ご寄付など、身にあまるご愛顧をいただいております。いま、この論考に接して、私は即座に、きたる《マタイ受難曲》や《ヨハネ受難曲》上演の際のチラシ、プログラムには、シャガールの中から十字架像をとり出せないものか、これから調べてみたい、という気にかられました。

シャガールというのは、日本でもしばしば膨大な数の作品展があり、広く愛されている作家のようで(1887-1985)。現在の白ロシア共和国のヴィテブスクにあるユダヤ人街の労働者の家に生まれ、ペテルスブルクで美術修行、1910年からパリに移る。第2次大戦でアメリカに亡命。戦後ふたたびフランスに定住して、97歳で世を去る。その愛されている理由を深くさぐることもなく、人の心を離さない人なのだ、と感じている程度でした。いま、宮田先生から、シャガールの生い立ち、人となり、作品を通じた、彼の精神の動き、ひいては現代の宗教の根本問題を学ぶことができ、すべてが鮮やかな光に照らされた思いです。

この「月報」紙上でも、第5回ヨーロッパ演奏旅行を前にして、まさに時機にかなったすばらしいご新著『ホロコースト<以後>を生きる』をお贈りいただき、そのご紹介を載せさせていただきます(2009年3月、第561号)。この年の夏の旅行中に、ストラズブルに1泊の滞在をとって、大聖堂の見学を、今回もまたほんの1時間程度ですが、かろうじて実現させてきました。

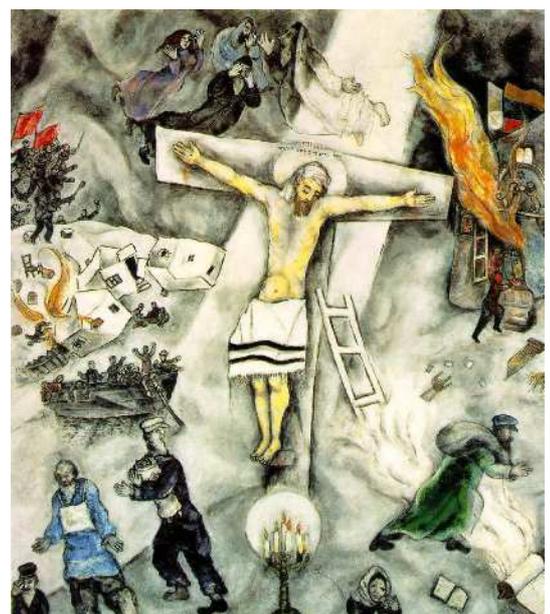
ユダヤ教とヨーロッパ・キリスト教との複雑な経緯をじっくり考えるゆとりもなかったのですが、その短い間に私の感じたのは、聖堂の側面に立っている、例の目隠しをされた「シナゴーク」の女性の美しさでした。勝ち誇ってそれを見おろす「エクレシア」のほうも美しいのですが、神の前にはいかにも不遜。「シナゴーク」(ユダヤ教の寓意)のほうに人間の真実の姿が具現している感じを強くうけました。神に対する人間は、盲目で、槍も折れ、うなだれているのがふさわしいでしょう。

一方、かつては称讃されつづけた「エクレシア」(キリスト教会)のほうは、アウシュヴィッツ後の今日では、何とも痛々しいほどの思い上がりに見え、はるかゴシック時代の昔から、近代 現代の人類の頹廃を予告していたとさえ感じられたものでした。時代の推移とともに、形に残されたものの姿も、違って見えてくるのですね。

シャガールの、生涯をかけた作風の変遷は、時代というより個人の内面の変化に応じたもののようで、1938年の「白い十字架」にはじまって、「黄色の十字架」「青の十字架」、そして1970年のチューリヒのステンドグラスに、神の平和の国を音楽で讃美する姿にいたるまで、ユダヤ教とキリスト教の恐ろしい反目を越えた、真の信仰を描きだす、壮大な芸術だったとのこと。

これまで、当合唱団の印刷物では、ジョットなどの早いルネサンス期の画像が好まれています。いまだにイスラエルとパレスチナの問題が熾烈をきわめる現代に、バッハの受難曲と引き合わせるにあたり、シャガールを借りてみるができるものか、これから時間をかけて考えてゆきたいと思います。深い示唆にみちた宮田先生の論文との出会いを、心から感謝いたします。

[3月11日の地震で、仙台にお住まいの宮田先生が気遣われましたが、『世界』5月号で、ご自身の「いま人間であること 大地震の災禍の中で考える」によって、ご無事だった当日の経緯もよく伺うことができました。この5月号は、全体たいへん読み応えのあるもので、多くの方が読まれるよう、おすすめいたします。]



「白い十字架」1938年・キャンヴァスに油彩・155×140cm・シカゴ美術研究所蔵。

「イエスの十字架のまわりで、これまで彼にとって親しかったユダヤ人社会が文字通り徹底的に破壊されようとしている」(『世界』2011年2月号246頁)

バッハ合唱団をとりまく人々

[第 3 回]

大村 恵美子

主宰者が、みずから指揮をしなければならないと決意したのは、創立 17 年後の 1979 年でした。その間の経緯は、『東京バッハ合唱団 三十年の歴史』(1992 年、国際文化出版社)第 2 部・第 3 章の「指揮者を失う」/「指揮者に迷う」/「新任指揮者」の各項あたりで述べたところです。

創設以来、定期演奏会(年 3 回、後に 2 回)は、下記の諸氏によって引き継がれてきました。

池宮英才(初公演 1962 年、第 1 回定期、1963 年)
小林道夫(第 2 35 回定期、1963 75 年、13 年間)
長谷川朝雄(第 8 11 回、1965 67 年)
若杉 弘(第 29 回、1973 年)
池田明良(第 36 回、1976 年)
堤 俊作(第 37-44 回、1976 78 年)

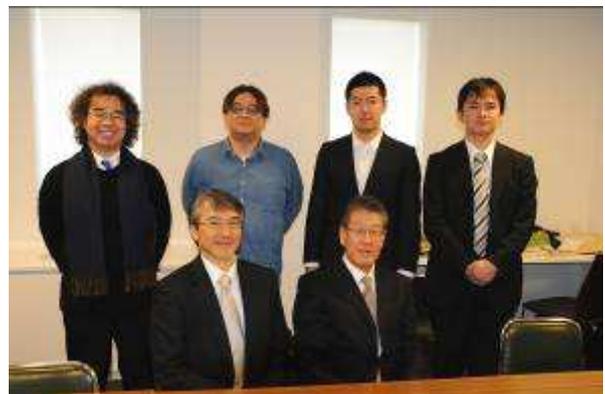
しかし、経済基盤も不確定な小合唱団を、最終的にみとるのは、私のほか誰一人いないと思い知らされた結果、その年 1979 年の「初期カンタータ連続演奏 I」(第 45 回定期)をもって定期演奏会に指揮者デビューし、それいらい今日まで、週 2 日の練習日も含め、やむを得ぬ事情のほかは、欠かさず私がつづけてきました。

オーケストラも、はじめは固定しなかったものの、私の指揮以後は、管・打楽器を境野達男さん(ファゴット)、弦を松井啓子さん(ヴィオラ)のお 2 人が中心となって、毎回の必要を、優秀な演奏者の方々にみたくていただきました。(オルガニスト草間美也子さんは、次回にご紹介)

写真は、今年 2011 年 1 月 9 日の第 105 回定期演奏会で協演されたメンバーですが、この日に加わらなかった楽器奏者でも、すでに 20 年、30 年とつづけてくださり、気心の知れた方々が多数おられ、写真に入らなかったの



後列・左から、松井啓子(ヴィオラ)、船田裕子(チェロ)、坂田和泉(ヴァイオリン)、村田早苗(ヴァイオリン)、村松伸枝(ヴァイオリン)。前列・左から、桐山なぎさ(ヴァイオリン)、草間美也子(オルガン)、若林沙弥香(オーボエ)の皆さん



後列・左から、溝入敬三(コントラバス)、下田太郎(ホルン)、鎌田朋幸(トランペット)、佐藤太一(イングリッシュホルン)。前列・左から、辻功(オーボエ)、境野達男(ファゴット)の皆さん(上の写真とも、石橋メモリアルホールの中庭にて)

は残念です。中でも、聴くものの心を溶かすような演奏をつづけてくださったオーボエの木原敬三さんが、2001 年に他界なされたのは、とても悲しいことでした。私たちの「カンタータ 50 曲選」の CD に、その嫋々たるオリガート旋律は何曲も残されているのが、せめてもの救いです。

野尻湖合宿 & 湖畔のチャペルコンサート

12 月《口短調ミサ曲》公演に向けて、2 泊 3 日(1 泊のみも可)の強化合宿です。参加自由ですが、可能なかぎりの参加をおすすめします。詳細続報。

<合宿> 8 月 5 日(金) ~ 7 日(日)

[宿泊先] 野尻湖レイクサイドホテル(旧・野尻湖ハウス)

<http://www.lakeside-h.com/index.html>

<演奏会> 8 月 6 日(土) 15:00 開演、入場無料

[会場] 神山教会(NLA オーディトリウム)

[曲目] 《口短調ミサ曲》より“グロリア”他、カンタータ第 71 番

[出演] 内山亜希(ピアノ)、東京バッハ合唱団(合唱)

大村恵美子(指揮/訳詞)

創立 50 周年記念企画 1

《口短調ミサ曲》日本語演奏 [初演]

[日時] 2011 年 12 月 3 日(土) 14:00 開演

[会場] 杉並公会堂(東京・荻窪)

[出演予定]

光野孝子(ソプラノ)、佐々木まり子(アルト)

鏡 貴之(テノール)、新見準平(バス)

東京カンタータ室内管弦楽団(オーケストラ)

草間美也子(オルガン)、東京バッハ合唱団(合唱)

大村恵美子(指揮/訳詞)

[チケット発売] 2011 年 7 月 1 日(予定)

『バッハ コラール・ハンドブック』

多くの方から 反響をお寄せいただきました

・今般の、ご夫妻のご著者は、長く手元において、読み、学ばせて頂く、終生の書であると言えるでしょう。お二人の努力に、心から敬意を表します。

(南 吉衛 団友、牧師)

・『バッハ コラール・ハンドブック』、いつも手元において、すぐに調べられるのが何より有難く、あつく御礼申し上げます。(草間美也子 オルガニスト)

・何故バッハのコラールが、現代の私どもに、かくも、たとえようもない優しいぬくもりを与えてくれるのか、かねてから不思議に思っておりましたが、154 曲のコラールすべてに、必要細目が網羅され、モテット、受難曲、オラトリオ、カンタータを聴きながら、日本語歌詞、譜面、内容の索引と、これらの疑問に答えてくれる、願ってもないハンドブックです。50 年にわたる東京バッハ合唱団の日本語演奏の実績をふまえて始めて成し得た賜物と、尊いことに思います。(花井鉄弥・友子 後援会員)

・ご本、届きました。さっそく【106】 おお 主のみ頭 血に蔽われ を歌ってみましたら、なつかしい人に会ったような気がして、心が熱くなりました。

(藤田玲子 後援会員・元団員)

・この不安定な時期にあっても、意思を貫き通していく努力に学ばせていただきます。とても見やすく、口ずさんでいます。オルガンでコラール前奏曲を弾く参考にもなり、活用させていただきます。

(菅原文子 後援会員・元団員)

「毎日新聞」 2011 年 4 月 13 日 (東京夕刊)

刊行『バッハ コラール・ハンドブック』
曲に全歌詞、旋律譜など付け

バッハの教会カンタータや受難曲、オラトリオ、モテットなどに用いられているコラール(会衆歌)154 曲の各曲に、全歌詞(ドイツ語と日本語) 旋律譜などを付けた「バッハコラール・ハンドブック」(大村恵美子・大村健二編、春秋社・2940 円)が刊行された。

バッハの音楽は、民衆の間に生まれて根づいたコラールを源にしているために、どれほど哲学的、宇宙的に壮大になっても、地に足が着いている。たとえば「マタイ受難曲」の感動的な「ペテロの否認」の場でも、しめくくるのはコラール「たとえあなたから離れても、また必ず戻ってきます」(*)だ。

[*]【144】 主を離れし われ ふたたび帰りゆく 第 6 節]

バッハは同じコラールを複数の曲で用いているが、本書の巻末索引などを通して調べれば、どのコラールがどの曲にかかわるか一目瞭然になる。また日本語訳が実際に歌われることを目的にしているのも特徴。ファンにも研究者にもうれしい一冊だ。【梅津時比古】

・日本語でバッハのコラールを鑑賞することができるのは、何ととっても、たいへん有難いことで、今後のバッハ鑑賞の手引きとして活用させていただきます。

(森野善右衛門 団友、牧師・神学者)

・いろいろな方面の仕事に手を広げている自分としては、一筋の仕事は何十年も続けていらっしゃることに驚嘆するばかりです。お体に気をつけられて、いつまでも先頭に立っていらっしゃいますように。

(小林道夫 団友・元指揮者、チェンバロ奏者)

・‘大変な日本の国’を如何にして生きていくか、この御本は多大な力を持つこととございましょう。

(横河マリ子 後援会員)

・『コラール・ハンドブック』届きました、これで今日から落ち着いて拝読できます。

実は、教会で“音楽を聴く会”という物を任されており、中心はバッハの曲ですが、バロック前期からロマン派の曲をちりばめています。今のところ月に 2、3 回のペースで、時節のカンタータを聴いて頂くようにしています。時間は有り余るほど有りますが、資料というかテキスト作りに奮闘しています。

今回このハンドブックがどれだけ役に立つか、と同時にどう使わせて頂くか悩みも増えました。バッハのカンタータは決して特殊な物ではなく日常生活の中でこそ生きるということが、大村君の後書きの中にあるのを読み、大変心強く思い、「言い出しっぱはワシだけど、なんでこんな大役を引き受けたのか」と心が折れそうになった時



発行：春秋社
体裁：A5 判 / 400 頁
定価：2940 円(税込み)

合唱団関係者・月報
読者の皆さまには、割引
価格でお届けいたします。

特価：2500 円
送料：300 円(郵便振
替用紙同封します。後
日、郵便局でご清算くだ
さい)

事務局へお申し込み
ください(申込み先：月
報タイトル囲みご参照)

に、何度も読み返すことになりそうです。コラールを基とした各楽曲との関連などは、手元に有る著書の中でもこれだけ体系的で分かり易く記された物は有りません。

(田島 顯 後援会員・元団員、大阪在住)

・「はじめに」と「後書き」を読んで、お二人の長い時間をかけたご苦労と、バッハコラールへの深い思いを知り、あらためて心動かされています。1月の演奏会で、最後に思わず声を張り上げてみなさんと歌ったコラール、【78】 イェス わが心の愉しみ は、とても感動的でした。ページをめくりつつ、知っていそうな曲探しを楽しんでいます。阿佐ヶ谷教会で2回にわたり、佐藤望さんによるバッハの教会音楽のお話があり、どうしてバッハがミサ曲を？ の話題もあったりして、12月演奏会がいよいよ楽しみになりました。(浜島和子)

・このような書籍は、おそらくお二人にしか成し得なかった事ではないかと思われます。思想の首尾一貫性に感動を覚えるとともに、敬服の念を禁じ得ません。「私の最後の望みは、私の試みた訳詞によって、日本人である私たちが、(...)生活の中で自然に、時々にはふさわしいバッハのコラール旋律が口をついて出てくるようになること...。人類のはるかな将来を夢見るばかり...」とは、バッハの音楽を愛してやまない大村先生ならではの、真骨頂を表すお言葉として、豊かな余韻と残響を奏でます。

(佐伯雅巳 声楽家)

・遂にというか、こんなにも早く、一冊となったのか、と驚いています。内容も充実し、実際に教会の聖日礼拝の中で聖歌隊などによって用いることができるのではないだろうか、とあれこれ考えております。

(柳元宏史 団友、牧師、山口に転任)

・今まで、バッハ合唱団の演奏会で、たくさんの曲を聴かせていただいて参りましたが、私は何故か、華やかなアリアより力強いコラールに、いつも心惹かれておりましたので、今回の出版をとっても楽しみにしております。この大きな災害のなか、昔のコラール作家たちの神様への思いをとおし、私自身の信仰をもう一度、見つめ直してみたいと思っております。

(武藤京子 後援会員)

・この気の遠くなるような龐大な作業を成し遂げられた大村ご夫妻の熱意に敬服いたします。

この本の意味するものは、冒頭に書かれているように「《きよし この夜》が、原語が何語かも知られぬままに世界中で愛唱されているように」という言葉に分かりやすい説得性を感じます。この言葉こそ、大村先生のこれまでの音楽活動の底に一貫して流れるものであり、この『コラール・ハンドブック』は、その道筋の上に当然あ

「山田耕筰作品集校訂日誌」

<http://blog.livedoor.jp/hisamatsu1225/archives/51595125.html>

2011年04月25日 20:55

『バッハ コラール・ハンドブック』@春秋社

春秋社の新刊です。I.S. バッハがカンタータや受難曲などに使った数々のコラールを収集した一冊。これはとてつもない遺産です。

分かっている方々にとっては常識なのですが、バッハのカンタータはバッハ自身が作曲した器楽曲や、新たに詞を書き下ろして作った合唱曲などのほかに、宗教改革者のルター自らも作曲したというコラールにバッハが伴奏を書いたものなども含まれています。「マタイ受難曲」も同じでピカンダーという作詞者の詩に曲をつけた部分と、キリストの受難について歌われた既製のコラール集を持ち込んだ部分があります(これは決してパクリではない)。

この既成品の部分に焦点を当てて、バッハが用いたコラールを集めたのが本書。なんというか、確認作業だけでもとてつもない労力が必要ですが、ここに歌ってちゃんと意味がわかる日本語詞がついて、通常の教会ミサでも歌えるようにしてあるのです。凄まじい労力がかかったと思います。

読んで瞠目するようなインパクトとは無縁ではありますが、計り知れない価値のある一冊だと思います。

この重みはきますね~。

ったものと思われます。

そしてこの本が、本当の意味での価値に輝くには、いまま少し時間を要するかもしれませんが、誠に立派な仕事をなされたことに、心からお祝いを申し上げます。

(渡邊 明 団友、声楽家)

・企画、内容からレイアウト、デザインにいたるまで、素晴らしい出来栄の『バッハ コラール・ハンドブック』、大変好評です。(松尾茂春 団員)

東京バッハ合唱団 <創立50周年記念ファンド> 報告

(2011年4月20日現在)

募金達成額：820,000円(応募人数：40名)

本年の年明けとともに、皆さんに呼びかけて、4年間の予定で始めた<創立50周年記念ファンド>は、4ヵ月ですでに目標額の6分の1が達成されています。こころより感謝申し上げます。

「バッハ4大合唱作品[日本語]連続演奏」を始めとする、すべての創立記念事業の完遂にむけて、ひきつづきご協力をお願い申し上げます。

- ・目的：団運営の安定を図り、創立記念事業を助成する
- ・基金の目標額：500万円
- ・募金単位：1口10,000円 × 500口
- ・募金期間：2011年1月から2014年12月
- ・郵便振替：口座番号 00190-3-47604、東京バッハ合唱団
(「記念ファンド」とお書き添えください)